

## 文の連結意味と連結要素

短文投稿テキスト「読者の手紙 (Leserbrief)」にみる文連結

磯 部 美 穂

キーワード：Leserbrief, テキスト生成, テキストの結束性, 文の意味関係, 連結要素

### 1. はじめに

個々の言語表現とは異なり、複数の言語表現によって、構成された言語表現のまとまりのことを「テキスト (Text)」という。語と語が、統語的・意味的な関係性で結びつき、文を生成するように、テキストは、文と文が、意味的に関係し合うことで構成される。文の生成には、いわゆる「文法 (Satzgrammatik)」と呼ばれる統語的な規則に従って、語と語、句と句が並べられ、意味的な関係性を生成するが、テキストの生成には、そのような模範的とされるような規則は存在しない。しかしながら、自由に複数の文をただ羅列した、「テキスト性 (Textualität)」という基準を満たさない言語表現のまとまりは、テキストとはみなされない。テキストは、書き手の意思、伝達内容・目的、状況に従い、複数の文が意味的に関連し合い、作り出された言語表現のまとまりである。テキスト言語学では、このような意味的な関係性を「結束性 (Kohäsion)」と呼び、テキスト性の中でも重要な基準のひとつとされている (Hallyday/Hasan 1976 : 4ff., Fix 2003 : 16f.)。

このようにテキスト生成においては、模範的な規則が存在せず、比較的自由な表現選択が可能である一方で、文と文は意味的な依存関係の基に連結し合い、結束性が形成されなければならない。文の連結の際、異なる二つの意味内容をあらかず文をどのように連結させるか、その際、どのような言語表現を選択するのかというのは、書き手にとって重要な問題となる (Vgl. Isobe 2015a : 99f., 詳しくは、2.2. 参照)。文を連結するためには、文と文の相互の意味関係を明示する「連結要素 (Konnektoren)」と呼ばれる語や句が用いられることがある (Heringer 2015 : 16f.)。これらは、意味関係を明示し、容易に文を連結させることができるが、テキスト内のすべての文の連結に用いられるわけではない。このようなテキスト生成に関わる事柄を踏まえて、本研究では、テキスト言語学および応用言語学の観点から、テキストにみられる文と文の相互依存的な意味関係と連結要素に着目し、テキスト分析をおこなっていく。分析には、雑誌に掲載される短文投稿テキスト「読者の手紙 (Leserbrief)」を対象とする。

## 2. 文の連結

### 2.1. 文の意味関係

本論文では、テキスト内における文と文の意味的な依存関係のことを文の「意味関係 (semantische Relation)」と呼ぶ。文と文は、それぞれが表す意味内容が文脈に従って正確に解釈されるために、相互に依存的な意味関係にある。意味関係とは、こうした文の依存的・意味的關係性のことをいい、その種類として、ここでは Heringer (2015:26) の意味カテゴリーを参考にする。Heringer は、文法上、接続詞、接続詞的副詞に分類される語の意味カテゴリーを基準とし、次のような意味関係を挙げている。下に、意味関係とそれをあらわす接続詞の例を挙げる。

表1 意味関係とその意味をあらわす接続詞例

意味関係	接続詞
1) 付加的 (additiv)	<i>und</i>
2) 反意的 (adversativ)	<i>aber</i>
3) 選択的 (alternativ)	<i>oder</i>
4) 因果的 (kausal)	<i>denn</i>
5) 終局的 (final)	<i>damit</i>
6) 譲歩的 (konzessiv)	<i>trotzdem</i>
7) 条件的 (konditional)	<i>wenn</i>
8) 結果的 (konsekutiv)	<i>so dass</i>
9) 比較的 (komparativ)	<i>wie</i>
10) 時間的 (temporal)	<i>und dann</i>

これらの意味関係は、いずれも結合する二つの文があらわす意味内容の相互の関係性で決定される。先行する文の意味内容に対して、後続の意味内容がどのような役割をもっているか、という相対的な基準によって、意味関係を決定することができる。例えば、付加的な意味関係の場合には、後続する文は、先行する文の意味内容と同じ性質の意味内容、あるいは、追加的な情報をあらわす。反意的な意味関係の場合には、後続する文は先行する文の意味内容に対する、反対の評価あるいは情報を含む。下に Heringer (2015:18) の例を引用する。<sup>1</sup>

付加的：

- (1) Sie haben nichts gespart **und** keine Bank will ihnen Geld leihen.

(彼らは全く貯蓄をしなかった。そして、どの銀行も彼らにお金を貸そうとしない。)

反意的：

- (2) Das Haus ist klein, **aber** es liegt sehr schön.

(その家は小さいが、とても美しい佇まいだ。)

<sup>1</sup> 日本語訳は筆者による。例文内の太字は連結要素を示す。

例(1)では、[貯蓄をしていない]という意味内容に対して、意味内容[銀行はお金を貸さない]という情報が付加されており、例(2)では、[小さい]という家に対する否定的な評価に対し、反対の[美しい]という肯定的な評価が述べられる。

また因果的、時間的意味関係では、先行する文と後続の文のそれぞれの意味役割が交替することがある。例えば、因果的意味関係の場合、先行する文が〈結果〉の意味をあらわす場合、後続の文は〈原因〉となり、先行する文が〈原因〉の意味をあらわす場合には、後続の文は〈結果〉の意味をあらわす。下の例は、同じ意味内容をあらわす文と文の連結をあらわすが、連結要素の種類によって、先行する文と後続の文が入れ替わる。

〈結果—原因〉

- (3) Er kam zu später Stunde zu seiner Gaststätte zurück. **Denn** [dort bekam er noch zu trinken.] GRUND  
(彼は遅い時間に宿に戻ってきた。というのも彼はそこでまだ飲まなければならなかったのだ。)

〈原因—結果〉

- (4) [In seiner Gaststätte bekam er noch zu trinken.] GRUND **Deshalb** kam er zu später Stunde dort-  
hin zurück.  
(彼は宿でまだ飲まなければならなかった。だから遅い時間にそこに戻ってきたのだ。)  
(o.a., 19)

上の例文は共に、文と文が因果的意味関係で結合されている。例(3)と例(4)は、それぞれ同じ二つの文が連結されたものであるが、前者は、連結要素の並列接続詞 *denn* が後続文の文頭に置かれ、先行する文の意味が〈結果〉となるのに対し、後者は、連結要素の副詞 *deshalb* が後続文に置かれ、先行する文が〈原因〉をあらわす。時間的意味関係の場合もこれと同様に、先行する文において〈時間的に先行した事象〉があらわされる意味関係と、〈時間的に後続した事象〉があらわされる意味関係の二つのカテゴリーが可能である。

以上の意味関係とその連結過程を参考に、次の記号を用いて、意味関係の分析をおこなっていく。因果的および時間的意味関係には、それぞれ a, b の二つの意味関係に区分する。

表2 意味関係とそれを示す記号

意味関係	使用記号
1) 付加的	<u>und</u>
2) 反意的	<u>aber</u>
3) 選択的	<u>oder</u>
4) 因果的 a	<u>denn</u>
因果的 b	<u>deshalb</u>
5) 終局的	<u>damit</u>
6) 譲歩的	<u>trotzdem</u>
7) 条件的	<u>wenn</u>
8) 結果的	<u>so dass</u>
9) 比較的	<u>wie</u>
10) 時間的 a	<u>und dann</u>
時間的 b	<u>zuvor</u>

## 2.2. 連結要素

文の意味関係は、連結要素によって表現上明示されることがある。意味関係を明示する連結要素の例として Heringer (2015:18) は、「そして (付加的, 連続的, 時間的)」, 「しかし (反意的)」といった関係をあらわす次のような語句を挙げている。

表3 連結要素

### 連結要素

a) 接続詞 (Konjunktionen)	<i>und, aber, denn</i>
b) 従属接続詞 (Subjunktionen)	<i>so dass, obwohl, wenn, falls</i>
c) 接続詞的副詞 (Bindeadverbien)	<i>sonst, trotzdem, also, jedenfalls</i>
d) 不変化詞 (Partikeln)	<i>nämlich, ja</i>
e) 分詞句 (Brückenausdrücke)	<i>vorausgesetzt, kurz gesagt</i>

これらの連結要素は、それぞれ語の意味から意味関係を明確かつ端的にあらわすことができるものである。先に指摘したように、どのような連結要素を選択するか、というのは、テキスト生成における重要な言語化の過程である。しかし、文の連結には、必ずしもこのような意味関係を明確にあらわす連結要素が用いられる訳ではなく、意味関係は明示化されず、代名詞や指示詞、造語など前方照応、後方照応機能を担う語句によって、文と文が連結されることもある (磯部 2004:68f., 2006:34f.)。これに対して、既習語彙数の少ないドイツ語学習者がドイツ語でテキストを作成しようとする際には、意味関係をより明確にするため、上記のような限られた連結要素が多用される傾向がある。次の例は、日本人ドイツ語学習者によって作成されたテキストから抜粋したものである。

- (5) Die Namensänderungsgesetz sagt, dass ein passender Grund nötig ist, um Namen zu ändern. **Aber** das Detail der Namensänderungsbedingung wird im Gesetz nicht geschrieben, **deshalb** steht das Detail in der Verwaltungsvorschrift. **Demnach** kann ein Name [...] geändert wird.

(名前変更に関する法律によると、名前を変えるのに十分な理由が必要だという。しかし, 名前を変更できる条件に関する詳細は述べられていない。そのため, 行政規定文書には詳細がある。それによれば, [...] といった名前は変更することができる。)

例(5)では、後続文の文頭に、それぞれ連結要素である接続詞 *aber*、接続詞的副詞 *deshalb* が置かれており、最後の文は、先行する指示対象を照応する指示詞 *da-* と前置詞の融合形 *demnach* が用いられている。拙訳文内の下線部を参照すれば、これらの連結要素は、いずれも文の連結を意味的に明確に指示するために用いられていることがわかる。ドイツ語母語話者によって作成されたテキストと比較すると、学習者のテキストでは、接続詞や接続詞的副詞などの連結要素が多用される傾向があることは Isobe (2015:99f.) でも指摘している。学習者の場合、母語干渉や既習の語彙量の不足など複雑かつ複合的な要因が考えられるが、テキスト生成という、思考を順に言語化していく認知的な行為において、ドイツ語母語話者と学習者の間には、どのような言語化、表現選択過程の相違があるのか、という問題は興味深い。本研究は、こうした語学教育的観点から出発した、ドイツ語テキストの生成過程に関する分

析の一つである。ドイツ語母語話者によって作成されたテキストの分析を通して、実際にどのような連結要素が選択されているのか、意味的・形態的観点から考察し、語学学習への応用方法に関する検討題材を見つけ出す。

### 3. 読者の手紙 *Leserbrief* の分析

本研究では、雑誌に投稿された短文テキスト読者の手紙 (*Leserbrief*) を分析の対象とする。このテキストジャンルは、テキスト言語学分野において、未だ体系的な研究がおこなわれていない (Fix 2007: 220ff.)。しかしながらドイツ語圏のメディアにおいては、19世紀より新聞紙上における公の議論の場として活用されており (Polenz 1999: 84f.)、また、ドイツ語学能力試験においても、書く能力を試すテキスト作成の課題とされていることなどからも、コミュニケーション上の重要なテキスト機能・役割を担っていると指摘することができる (Isobe 2015a: 95)。近年の読者の手紙は、電子メールでの投稿が可能となるなど、形式は変化し続けているが、校閲や編集といった作業が比較的関与しないテキストジャンルであり、いわゆる「素人のことば (*Laiensprache*)」の分析を可能にするものである。また、限られたスペースに掲載される短いテキストであることも、テキスト内の全ての意味関係を分析するのに適している。こうしたことを踏まえ、記事として掲載されたテーマに関する読者の意見や思考が、限られたスペースの中で説得性を含みながら、どのように言語化されていくのか、テキスト生成の過程を明らかにしていく。

分析には、ドイツ語圏で発行されている月刊誌 *DER SPIEGEL* (以下、SP とする)、と *Profil* に投稿された読者の手紙70通のテキストを使用する。これらは、合わせて21のテーマに関して読者の意見が述べられたものである。テキストは、平均54.4語からなるもので、最長のテキストで128語、最短のテキストで17語であった。文に関しては、平均2.9の文から構成されており、最長で8文、最短で1文しか掲載されていない。2.1. で述べた記号を使用し、テキスト内の文の意味関係を明らかにした上で、そこにみられる連結要素を分析する。テキストジャンルとして特徴的な文体について述べた上で、意味関係と連結要素について分析をおこない、連結手段について考察をおこなう。連結要素は、Herlinger (2015) で挙げられている要素を参考にし、どの意味関係を連結する場合に頻繁に用いられているのかを明らかにし、文の連結過程の傾向を示す。なお、分析では、主文と副文からなる文は一文とし、コンマで区切られる文と文の意味関係は考慮しない。

#### 3.1. 読者の手紙の文体的特徴

分析をおこなった70の読者の手紙のうち、10のテキストが単一文、あるいは、コンマ、セミコロン、コロンで区切られた複数文からなる一文で構成されている。読者の手紙は、雑誌記事の内容に関して、読者が直接的に意見を述べたテキストであり、通常のテキストのように、導入からテーマ展開といったテキスト構成上の前半部分は省略される。また、編集者による校正がされておらず、読者の個性的が反映されたことばによって作成されたものであり、通常の雑誌記事などのテキストにはみられない文体的特徴がある。例えば、次のテキストは、イランの核兵器に関する記事に対して投稿されたテキストである。

- (6) Die Wahrnehmung, wer wen bedroht und schon angegriffen hat, ist in Palästina und Iran eine ganz unterschiedliche.

(誰が誰を脅かし、すでに攻撃をおこなったという認識は、パレスチナとイランでは、全く異なっている。)  
(SP, Nr. 11/2012 : 6)

- (7) Der Zuwachs an Destabilisierung in der Region durch eine iranische Atombombe resultiert aus der Tatsache, dass es dann drei Atomkräfte in der Region gäbe, und nicht etwa daraus, dass einzelne Entscheidungsträger irrational handeln können.

(イランの核爆弾により、その地域の不安定さを増大させたのは、その地域にある3つの核の脅威があるという事実であり、そして、それぞれの決定権を握る者が非合理に行動したといったことが理由ではない。)  
(SP, Nr. 11/2012 : 6)

いずれも複合的単一文で意見が述べられており、それぞれ17語、34語からなる冗長かつ複雑な文構造である。例(7)では、並列の接続詞 *und* によって文成分が添加される上に、前後の文中には、それぞれ *dass* 文に導かれた副文が挿入されている。このように読者の手紙では、文そのものは冗長的であるが、テキストとしては短く、簡潔な論の記述となっている。順序立てた論の展開はみられず、簡潔に効果的な表現を駆使して、意見が記述される。批判や皮肉といった筆者の主張を説得的に表現する手段として、反語的疑問文の繰り返しや婉曲話法といった表現が多くみられる。

- (8) Sind denn israelische und US-Politiker von jeglicher Vernunft verlassen, dass sie durch Provokation, Propaganda und Lügen einen Krieg entfachen? Ist es denn nur die iranische Seite, die nicht die Wahrheit sagt?

(イスラエルとアメリカの政治家たちは理性を失ってしまったのだろうか、そして挑発や宣伝、嘘によって戦争を扇動するのだろうか？真実を語っていないのは、イスラエル側だけなのだろうか？)  
(SP, Nr. 11/2012 : 6)

- (9) Können Plagiatsjäger die Wissenschaft retten? Das Zitieren ist ja nicht das Problem. Bei einer Dissertation müsste es eigentlich um das Darstellen von Forschungsergebnissen gehen.

(盗用の取り締まりは学問を救うことができるのだろうか？しかし引用することは重要ではない。実際、博士論文には、研究成果を記述することこそが重要であろう。)

(SP, Nr. 11/2012 : 6)

例(8)は、二つの疑問文からなるテキストである。まずは、イランの核兵器保有に対する各国の反応について筆者の批判的意見が、疑問文の形態で述べられ、問題が提起される。後続の文中では、同じく反語疑問文の形態で、[イスラエル以外の国も真実を語っていない] という真の意見が強調される。例(9)は、論文盗用問題に関する記事について投稿された読者の手紙から一部を抜粋したものである。最初の疑問文の内容に対して、[確かに盗用を発見することは必要であるが、引用することというのは、重要ではない] という反対の意見が記述される。まずは疑問文の内容に対する肯定的な態度を示した上で、否定的な見解が述べられ



る。続く文では、それに対する理由が婉曲話法の接続法Ⅱ式を用いた文で記述される。

このような疑問文の形式で問いかけ、書き手が答えを明らかにするような反語表現、同じ形式の文を繰り返す並行表現は、修辞法の手法であり、演説などで使用される表現方法である（Vgl. Kolmer/Rob-Santer 2002 : 69f., 87f., 佐藤ほか2008 : 55ff, 500ff.）。それゆえ、読者の手紙の文体は、文語よりも口語文体に近似した印象を与える。読者（＝書き手）の意図を正確に解釈するためには、テキスト全体の文脈、テーマとの関係性、あるいは世論の方向性など言語外の知識などが必要となり、文の意味関係に関しても、言語表現上の意味内容だけでは正確に解釈することができない。例えば、次のテキストは、4つの文からなり、それぞれの文の意味関係は、下のように分析することができる。

- (10) Atomwaffen in der Hand Irans sind gleichzeitig Waffen gegen sich selbst. *\_deshalb\_* Die Sogen Israels sind verständlich, aber sind sie wirklich realistisch? *\_denn\_* Kein iranische Regime kann es ein Hiroshima in Teheran ankommen lassen. *\_denn\_* Denn dies wäre die unweigerliche Folge eines Angriffs auf Israels. (SP., Nr. 11/2012 : 6)

（イランが所有する核兵器は、イラン自らに対する兵器である。[因果的 b : それゆえ] イスラエルの抱える不安も理解できるが、イランの核兵器は現実的だろうか？ [因果的 a : というのも] イラン政権は、テヘランをヒロシマ（被爆地）にしようとするのではないだろう。[因果的 a : というのも] イスラエルを攻撃するのなら、その必然的な結果としてイランが核兵器によって攻撃されてしまうのだから。）

最初の文で「イランが所有する核兵器は自らに向けられた兵器である」という主張が述べられ、続いて、それを根拠とした結論〈結果〉「イランの核兵器所有は現実的ではない」という内容が「本当に現実的なのだろうか？」という疑問文で、問いかけの形式で記述される。その理由〈原因〉として「自国の首都を被爆地にしようとする政権はない」ことが述べられ、その内容に対する理由が補足的に「イスラエルを攻撃することは自国が攻撃されるのだから」と付け加えられ、テキストが結ばれる。このテキストでは、最後の文の文頭に置かれた *Denn* だけが、文の意味関係を明確にする連結要素として使用されている。

以上のような文体的特徴を考慮した上で、テキスト内の意味関係とそれをあらわす連結要素の分析をおこなっていく。分析例として、テキスト(10)の分析結果をあらわすと次のようになる。

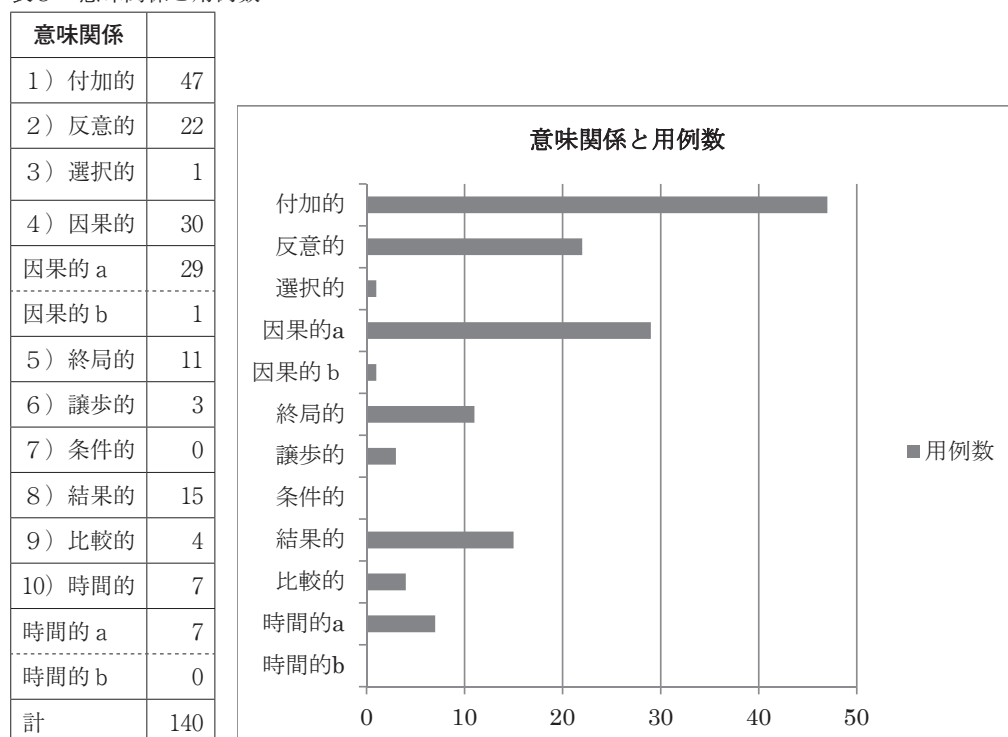
表 4 意味関係と連結要素の分析例

	意味関係	連結要素	文意味
Satz 1-Satz 2	因果的 b	なし	イランの核兵器は自国に向けられた兵器である [それゆえ] イランの核兵器所有は現実的ではない
Satz 2-Satz 3	因果的 a	なし	[というのも] 自国の首都を被爆地にしようとする政権はない
Satz 3-Satz 4	因果的 a	接 続 詞 <i>denn</i> : 文 頭	[というのも] イスラエルを攻撃することは自国を攻撃することになるからだ

### 3.2. 意味関係と連結要素

分析をおこなったテキストでは、条件的意味関係を除くすべての意味関係が抽出された。<sup>2</sup> 下位カテゴリーの時間的bの意味関係（\_zuvor\_）で連結される文は一例もみられなかった。それぞれの意味関係の用例数を以下の表に示す。

表5 意味関係と用例数



表からもわかるように付加の意味関係が最も多く、因果的、反意的意味関係が続く。意味関係をあらわす連結要素が用いられているのは、全体で45例と少ない。時間的、終局的、反意的意味関係をあらわす場合には、高い比率で連結要素が用いられる一方で、付加的、因果的意味関係では、それぞれ12、6例しかみられず、意味関係が明示される比率が低い傾向を確認することができた。以下の表に連結要素の例を示す。

<sup>2</sup> 条件的意味関係は、多くの場合、主文と副文であらわされる。本研究では、主文、副文間の関係性は対象としていないため、分析結果にはあらわれてこなかったと考えられる。



表6 意味関係と連結要素例<sup>3</sup>

意味関係		連結要素例
1) 付加的	12 (47)	<i>also, und, dabei, parallel dazu, auch, entsprechend</i>
2) 反意的	12 (22)	<i>aber, tatsächlich, leider, doch, ja, hingegen,</i>
3) 選択的	1 (1)	<i>bzw.</i>
4) 因果的 a	6 (29)	<i>denn, nämlich</i>
5) 終局的	1 (11)	<i>demnach</i>
8) 結果的	5 (15)	<i>daher, dann, so,</i>
9) 比較的	1 (4)	<i>wie</i>
10) 時間的 a	7 (7)	<i>weiterhin, jetzt, heute, nun, nach ...</i>
計	45 (140*)	

\* 意味関係全体の用例数

連結要素は、文の意味内容から解釈できない、または、強めて表示する必要がある場合に、意味関係を明示するために挿入される傾向がある。例えば、時間的關係性で連結する文には、全ての例で時間をあらわす副詞や時間関係をあらわす前置詞の連結要素が文中にあらわれる。また、反意的關係性の場合も、連結要素が置かれない例とは異なり、反意が強調される場合に、反意の接続詞、副詞が文頭、文中に置かれる。

- (11) Kritiker, [...], wurden nicht ernst genommen, belächelt oder im schlimmsten Fall verhöhnt. **Dann** kam die Finanzkrise. **Heute, ein paar Jahr später**, fordern die gleichen Medien von den Politikern strenge Regeln für die Finanzmärkte oder Banken auf ein handlicheres Maß zurechtzustutzen. (Profil, Nr. 31/2011 : 7f.)

(批判家たちは真に受けられず、苦笑され、あるいは最悪の場合には嘲笑された。[時間的 a : そして] 金融危機がやってきた。[時間的 a : そして] 今日、数年後に、同じメディアたちが政治家に金融市場あるいは銀行のための厳しい規則を適度な程度で調整するよう求めているのだ。)

- (12) Das Titelbild suggeriert eine von Iran ausgehende Kriegsgefahr. Tatsächlich ist es Israel beziehungsweise die Natanjahu-Clique, die den Frieden gefährdet. (SP, Nr. 11/2012 : 6)

(タイトルはイランを発端とする戦争危機を示唆している。[反意的 : しかし] 実際には、それは、イスラエルないし和平を推進するネタニヤフ派を発端とするのだ。)

例(11)では、時間の継続をあらわす副詞 *dann* と *heute* がそれぞれ文頭に置かれ、先行する文との時間的關係性をあらわしている。後者は、*ein paar Jahr später* という副詞句によって具体的な時点が示されており、より時間関係が明確に記述されている。いずれもこれらの連

<sup>3</sup> 数値は、連結要素の用例数、( ) 内の数値は意味関係の用例数を示す。

結要素がなければ、それぞれの文の意味内容を連結することができず、解釈することもできない。それに対し、例(12)では、文が互いに反対の意味内容をあらわしていることから、反意的意味関係を解釈することは可能であるものの、副詞 *tatsächlich* によって、その関係性が強調されている。

連結要素は、連結される二つの文が正確に意味解釈されるための手段として用いられ、意味関係が明確にできない場合や意味関係を強調してあらわす場合に挿入される傾向がある。付加的意味関係の場合も同様に、連結する文の意味内容が正確に解釈できるよう、意味関係が強調される場合には、接続詞や副詞が連結要素として用いられる。

- (13) In den letzten Jahren wurden in der stationären Pflege mehr als 70 000 Vollzeitstellen abgebaut. Es ist politischer Wille, dass Patienten immer kürzer im Krankenhaus bleiben. **Parallel dazu** steigt die Anzahl der von Burnout betroffenen Mitarbeiter. (SP, Nr. 31/2011 : 6)
- (ここ数年、入院治療に対して、7万人以上の常勤職が削減された。[付加的:そして]患者の入院期間を短縮することは政治的意向に基づいている。[付加的:そして]それに加えて同時に、過労で休養する看護師の数が増えている。)

例(13)では、医療現場の現状に関する3つの情報、① [入院治療に従事する常勤職の削減]、② [入院期間の短縮]、③ [過労で休養する看護師の増加] が並列して記述される。最後の文の文頭に、副詞句 *parallel dazu* が連結要素として用いられ、先行する文との付加的意味関係が強調して示される。付加的意味関係をあらわす連結要素には、より具体的な内容を記述する際に挿入される *also* や、先行する意味内容と同質の意味内容を追加的に記述する際に挿入される *auch, dabei, und* といった語が用いられており、いずれも先行する文との照応関係を示す。

### 3.3. 文の連結手段

以上の分析結果から、連結要素が用いられるのは、文の意味関係の明示が必要である場合や意味関係を強調する場合に挿入される場合に限られ、それ以外の場合には、意味関係は明示されない傾向があることが確認できた。このことは同時に、日本人ドイツ語学習者が連結要素を多用する要因でもあると指摘することができる。というのも、学習者がドイツ語でテキストを作成する際には、個々の文の意味関係を常に強調して表現する傾向があり (例(5)参照)、反対に、連結要素が挿入されない場合には、文と文が連結されず、テキストの結束性が形成されない。下の例は、日本人ドイツ語学習者が作成したスモール・トークに関する記事を要約したテキストからの抜粋である。<sup>4</sup>

- (14) Im Text schreibt Autorin darüber einige frühe Beispiele der europäischen Staaten. Die Staaten sind Frankreich, Italien und England. Die heutigen Beispiele, die eine Journalisten beobachtet, schreibt Autorin **auch**. Es gibt die Beispiele in Frankreich, Amerika und Deutschland. **Darin** er-

<sup>4</sup> 学習者による文法的な誤りは訂正せず原文のまま引用する。

klärt sie die kulturellen Unterschiede im Small Talk. Am Ende schreibt sie einen Schluss, dass Zuhören wichtige Kunst der Konversation ist.

(テキストでは、筆者は、[スモール・トークについての] ヨーロッパの国々の昔の例を書いている。国は、フランス、イタリアそしてイギリスである。ジャーナリストが観察した今日の例も作者は書いている。フランス、アメリカそしてドイツの例がある。その中で彼女(=筆者)はスモール・トークの際の文化的な相違を説明している。最後に彼女は、聞くことは会話における重要な技術であるとしている。)

テキストの中間部分において、連結要素の副詞 *auch*、指示代名詞と前置詞の融合形 *darin* が挿入されている。それ以外の箇所では、同一語彙が繰り返されているが、文と文はそれぞれ独立した意味内容をあらわしている印象を与える。特に、テキスト末の帰結文と先行する文からは、文の意味関係を解釈することはできない。

学習者にとっては、意味を明確にすることができる既習の連結要素が、主たる連結手段であるのに対し、ドイツ語母語話者は、連結要素以外の文の連結手段をもちいて、テキストを展開することができる。連結手段には、代名詞や指示詞の他、ドイツ語テキストにおいては、造語法が用いられる。造語法は、ドイツ語テキストの構成や展開の上で、重要な役割を担うことは、磯部(2012: 67ff.), Isobe(2015b: 189ff.)でも指摘してきた。今回の分析でも、特に付加的意味関係の際に、造語法が用いられている次のような例がみられた。

- (15) Seit langem weiß man, dass es in Somalia wegen der anhaltenden Dürre zu einer Durst-und Hungerkatastrophe kommen wird. Lediglich eine Viertelmilliarde Euro wäre nötig gewesen, um dem Wassermangel effizient vorzubeugen (profil, Nr. 31/2011 : 8)

(随分前から、ソマリアは常態化している干ばつのために飢饉状態になっていることは知られていた。その水不足を効果的に防ぐには、たった2億5千ユーロしか必要ではなかったはずだ。)

- (16) Im Gegensatz zur (offiziellen) medizinischen Versorgung haben wir in Österreich mit Sicherheit mindestens eine Zweitklassenaltersversorgung. Die Nutznießer dieses Zweitklassensystems sind unsere Beamten im Ruhestand. (Profil, Nr. 31/2011 : 8)

((公的な)医療扶助に対して、オーストリアは、少なくとも中産階級年金扶助制度をもっている。この年金制度の利用者は、退職した公務員である。)

例(15)では、先行する文中の *der anhaltende Dürre* (常態化している干ばつ) が、後続文において、*dem Wassermangel* (水不足) という名詞複合語で言い換えられており、同一語句を用いることなく、先行する文との連結を可能にしている。同様に、例(16)では、*eine Zweitklassenaltersversorgung* (中産階級年金扶助制度) という3つの語からなる名詞複合語が、*dieses Zweitklassensystems* (中産階級システム) という2つの語からなる名詞複合語で言い換えられる。ここでは、*-altersversorgung* (年金扶助制度) が上位概念をあらわす *-system* (システム) という語で言い換えられ、さらに指示詞 *dies-* と共に用いられることで、先行する文と連結関係がより明確にされている。

造語法は、雑誌記事や学術論文など学習者にとって難易度の高いテキストにおいて頻繁に使用されるが、読者という個人によって書かれた私的な言語表現においても、造語法が文の連結手段として用いられていることを確認することができた。

#### 4. おわりに

日本人ドイツ語学習者が作成したドイツ語テキストにおいて、文の連結の際には常に、接続詞や接続詞的副詞といった連結要素が用いられる。本研究は、こうした傾向を修正する応用方法を検討していくことを目的とし、ドイツ語母語話者によって作成されたテキストの分析をおこなった。分析結果からは、文の連結には、文の意味解釈が、相互の文の意味内容に強く依存する場合、あるいは、相互の文の意味関係を強調する場合に限り、連結要素が用いられる傾向を確認することができた。学習者が、文の連結手段として、連結要素しか用いることができないのに対し、ドイツ語テキストでは、連結要素の他に、造語法が連結手段として用いられることは、読者という個人的な書き手のことばにもあらわれるドイツ語の特徴的な言語慣習であるといえる。しかしながら、学習者が既習の代名詞や指示詞を応用し、学習言語の言語慣習に従って、テキストを作成することは非常に困難な作業であることは疑いない。本研究結果を踏まえて、応用の可能性を検証しながら、テキスト言語学的観点からさらにドイツ語の言語慣習を分析し、体系化していくことを今後の課題とする。

### 使用テキスト

Der Spiegel (Nr. 31/2011, Nr. 11/2012, Nr. 27/2016)  
profil (Nr. 31/2011)

### 参考文献

#### 一次文献

佐藤信夫ほか (2008) : 『レトリック辞典』第2版, 大修館書店。

#### 二次文献

Brinker, Klaus (2010) : *Linguistische Textanalyse. Eine Einführung in Grundbegriffe und Methoden*. 7., Aufl. Berlin. (Grundlagen der Germanistik=29)

Fix, Ulla (2007) : *Leserbriefe. Öffentliche politische Debatte „im Kleinen“*. In : *Sprachhandeln und Medienstrukturen in der politischen Kommunikation*. Tübingen. S. 213–238.

Fix, Ulla u.a. (2003) : *Textlinguistik und Stilistik für Einsteiger. Ein Lehr- und Arbeitsbuch*. 3., Aufl. Frankfurt am Main u.a.

Hallyday, M.A.K. / Hasan, R. (1976) : *Cohesion in English*. Longman.

ハリデイ, M.A.K./ハサン, R. 安藤貞雄ほか訳 (1997) : 『テキストはどのように構成されるか』 ひつじ書房。

Heringer, Hans Jürgen (2015) : *Linguistische Texttheorie. Eine Einführung*. Tübingen. (UTB=4471).

- 磯部美穂 (2004) : 「名詞複合語の意味解釈プロセスに関する考察—テキスト語を中心に」 In : 『Seminarium』 第26号, S.61-78。
- (2006) : 「テキストの表題における造語法—その表現機能と後方照応機能」 In : 『Seminarium』 第28号, S.29-50。
  - (2012) : 「読者はいかにして「新しい語」を理解するか—「テキスト語」としての複合的名詞化について」 In : 『「入門文法」よく説明・理解できていないこと テキスト理解を助ける中・上級文法の試み』 日本独文学会叢書083号。S.67-81。
- Isobe, Miho (2015a) : *Ein Schritt zum wissenschaftlichen Schreiben auf Deutsch. Eine Fallstudie : Verfassen eines Leserbriefs*. In : NU Ideas 4. 2. 2015. S.93-100.
- (2015b) : *Perspektivenwechsel und thematischer Anschluss als textuelle Leistung des Kompositums*. In : *S-hinshu Studies in Humanities*. No. 2. S. 189-196.
- Kolmer, L./Rob-Santer (2002) : *Studienbuch Rhetorik*. Paderborn, u.a. (UTB=2335).
- Polenz, Peter von (1999) : *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd. III, 19. und 20. Jahrhundert. Berlin.
- Van Dijk, Teun A. (1980) : *Textwissenschaft. Eine interdisziplinäre Einführung*. Tübingen. (übersetzt von Christoph Sauer).

## Eine Analyse zu semantischen Relationen und ihren Konnektoren bei der Satzverbindung in *Leserbriefen*

Miho ISOBE

Ein Satz bildet sich nach den Regeln der Satzgrammatik. Um einen Text zu schreiben, gibt es hingegen keine solchen Regeln. Der Text lässt sich nämlich nach dem kognitiven logischen Prozess konstruieren, wobei die Sätze miteinander in einer semantischen Relation verbunden werden. Daraus ergibt sich die Kohäsion, die einen textlinguistischen Begriff darstellt und als ein relevantes Kriterium für die Textualität betrachtet wird. D. h. bei der Textproduktion hat man kein Muster und kann relativ frei Ausdrücke auswählen, aber die müssen voneinander semantisch abhängig sein, um die Kohäsion zu bilden. Bei der Kohäsionsbildung spielen sogenannte „Konnektoren“ eine wichtige Rolle, z. B. Konjunktionen, Subjunktionen und Bindeadverbien. Sie sind zwar imstande, die semantische Relation zwischen den zwei Sätzen klar zu machen oder müssen aber nicht bei jeder Satzverbindung zum Ausdruck kommen. Denn im Deutschen finden daneben Pronomen, Determinativwörter oder Wortbildungen Verwendung, die aber nicht jede Satzverbindung semantisch verdeutlichen können. Beim Textverfassen kommt dann die schwierige Frage, wie die Sätze verbunden und welcher Ausdruck als Konnektor dabei ausgewählt werden soll. Damit könnten sich besonders Deutschlernende beim Deutschunterricht konfrontiert sehen.

Aus diesem Betracht setzt sich der vorliegende Beitrag mit der Analyse zu semantischen Relationen und ihren Konnektoren bei der Satzverbindung auseinander. Bei der Analyse kommt die Textsorte Leserbrief zum Gegenstand, denn im Mittelpunkt der Analyse steht, usuelle Stile der deutschen Schriftsprache systematisch darzustellen. In den Leserbriefen finden sich „Laiensprachen“, die redaktionell nicht verarbeitet sind. Der kurz gefasste Text ermöglicht auch, alle Satzverbindungen in einem Text zu analysieren. Durch diese Analyse werden die folgenden Fragen beantwortet : In welcher semantischen Relation stehen die Sätze im Text und welche Ausdrücke befinden sich als Konnektor? Zum Schluss des Beitrags wird der von einem japanischen Deutschlernenden verfasste Text zum Vergleich herangezogen. Eine Art von deutsch-schriftsprachlichen Stilen zu zeigen kann Hinweise geben, didaktische Methoden zur Verbesserung der deutschen Schreibkompetenz herauszufinden.

(2016年10月31日受理, 12月13日掲載承認)